

## (資料紹介) 後藤家所蔵玉眼木型

石井千紘 (鎌倉国宝館学芸員)

### はじめに

鎌倉彫の後藤家は、中世以来の伝統と技を受け継ぐ仏師の家系として知られる。鎌倉国宝館では後藤家より資料の寄託を受けており、主に近世から近代の後藤家の仏師が製作した仏像のほか、仏像の一部分や雛型と思しき小さな彫刻をまとめた箱などがある。今回紹介する玉眼木型は、箱に収められた多数の彫刻類のうちから見つかったものである。

「玉眼」とは、主に木彫の仏像の面部において、眼にあたる部分を削りぬいて貫通させたのち、瞳を描いた水晶製の薄いレンズを面部内側から嵌め込み、和紙や綿を白眼とし、当て木をして漆や木釘などで固定する技法である。仏像の眼に生々しさを与え、これに光が当たれば、時として眼球が動くように見えることもある。周知のとおり、仁平元年(1151)の奈良・長岳寺阿弥陀三尊像を初例として、鎌倉時代以降にはわが国の多くの仏像に用いられたため、玉眼そのものは特段珍しい技法ではない。しかし一方で、玉眼に用いられた水晶がどのように、また誰によって加工されていたのかを伝える資料や、このことに言及した先行研究はほとんど見出せない<sup>1</sup>。そうしたなかで、本稿で紹介する玉眼木型は、表裏面の墨書銘により、どの仏像のために作られた木型かが判明する珍しい事例であり、資料的価値も高い。近世の仏像製作の実態に迫る資料が現れたこの機会に、資料紹介と併せて、玉眼のための水晶加工とその工人についても少々考えてみたい。

### 1. 概要

本体は楕円の楕形に加工された素地の木片であり、ヒノキの一材から彫出され、表裏全体には細かい鑿痕が残る(以後、木型の凸面を表面、凹面を裏面とする。)<sup>2</sup>。木型表面の墨書が読める位置を縦と見ると、表面中央に2行、裏面も同様に、中央やや右寄りに2行、左縁に1行の墨書銘が残る。また、表面の縁の一部には墨線が残り、縁取りの跡かと思われる。保存状態は良好で、縁に2カ所小さな欠けが見られるものの、この他にはとくに傷はない【図1~3】。法量及び銘文は以下のとおりである。

#### (法量)

縦 8.3 cm    横 11.8 cm    高 5.0 cm

#### (墨書銘)

- ・表面中央  
「日向山靈山寺二王玉眼形、生際一丈、髻迄／一丈一尺五寸」
- ・裏面中央  
「長<sup>サ</sup>三寸九分／巾二寸八分」
- ・裏面左縁  
「此形之通<sup>リ</sup>少<sup>キ</sup>不違様<sup>ニ</sup>頼上候」



【图 1】表面



【图 2】裏面



【图3】斜侧面



【图4】仁王像（宝城坊山門）

表面の銘文により、本資料が日向山靈山寺の仁王像に用いた玉眼の木型であったことが判明する。靈山寺とは、いわゆる鉞彫りの薬師如来三尊像を本尊とすることで知られる現日向薬師宝城坊（伊勢原市）を指す。神仏分離令や廃仏毀釈を経て、明治3年には別当宝城坊以外の坊舎はすべて廃絶してしまったが、それ以前には日向山靈山寺と称し、『新編相模国風土記稿』は、多数の堂や坊舎を有する大規模な寺であったことを伝える。

また、本銘文によれば、この仁王像は髮際高で約300cm、像高約345cmということである。裏面中央は木型自体の法量を記しており、長さ・幅ともに今回実測した結果とほぼ一致する。後述するが、同面左縁の一文は水晶加工にあたっての指示とみられる。

## 2. 仁王像と大仏師について

銘文にいう仁王像は、現在も宝城坊の山門に安置されており、昭和57年に伊勢原市指定文化財に指定されている【図4】。過去の報告によれば、阿形像は像高350cm、吽形像は像高352cmで、寄木造、玉眼嵌入、朱漆塗ということである<sup>3</sup>。

形状は、阿形は髻を四束に結う。元結紐一条、その正面に靈芝形の飾りを付す。瞋目、開口して上歯と舌、下歯の一部を見せる。髭をあらわす。折返し付きの裙を着け腰帯で留める。天衣は頭部後ろを翻って大きく巡り、左右の肩前から前方に垂れて腰帯に一端絡み（現状は一度途切れる）、腰脇に垂下する。左手は屈臂して上方に振り上げ、持物を握る。右手は垂下し、掌を下に向けて五指を開く。腰を左に振り、右足を横に踏み出して立つ。吽形は元結紐の結び目を正面に表し、紐の左右端を上方に翻す。閉口。左手は垂下して拳を作る。右手は屈臂し、右肩前で掌を前にして五指を開く。腰を右に振り、左脚を横に踏み出して立つ。この他は阿形に準じる。

造立年代は江戸時代とみて相違ないものだが、本仁王像は、同坊の本堂に安置される木造賓頭盧尊者坐像の台座墨書銘によって、天保4年（1833）頃の作と判明している<sup>4</sup>。台座墨書銘の内容は以下のとおりである。

（賓頭盧尊者坐像台座裏墨書銘）

①当山別当現住

妙道

②于時 明和第三<sup>丙</sup>戌天

③奉再興賓頭盧尊

仁王尊再造立之時修之

別当宝城坊現住法印善応敬白

大仏師鎌倉府扇ヶ谷住

後藤真慶（花押）

小仏師六人

于時天保四癸巳年九月 吉祥日

（賓頭盧尊者坐像台座表墨書銘）

④ 別当現住

于時明和三<sup>丙</sup>戌天 妙道

再興賓頭盧尊者座台共新

当国鎌倉扇ヶ谷

正月吉祥日 後藤左近<sup>5</sup>

①、②及び④は同筆で、明和3年(1766)別当妙道の時、後藤左近によって賓頭盧尊者像の修理(銘文では「再興」と記す。)及び台座の新造が行われたものと思われる<sup>6</sup>。別筆の③では、その後、天保4年(1833)9月には賓頭盧尊者像が再度修理された。これは仁王像を再び造立したのと同時期で、鎌倉扇ヶ谷に住む後藤真慶が小仏師6名を伴って行ったという。つまり、賓頭盧像修理と仁王像造立の大仏師はどちらも後藤真慶であると考えられる。本仁王像から納入品や銘文は見つかっていないが、これに用いた玉眼木型が真慶の末裔である後藤家に伝来していることは、仁王像の大仏師が後藤真慶であることの裏付けとなろう<sup>7</sup>。後藤家に伝わる玉眼木型は、真慶が現日向薬師宝城坊の山門仁王像のために製作したものに違いない。

### 3. 水晶の加工について

玉眼の木型は仏像の眼に合わせて仏師が作るものだが、玉眼に用いる水晶は誰が加工したのだろうか。玉眼の成立や技法に触れたものは多数あるが、仏像製作において誰がこの部分を担っていたかについては、西川杏太郎氏がはじめて具体的に述べ、以後はこれを踏襲したもののみである<sup>8</sup>。すなわち、建仁3年(1203)無位時代の快慶の作である京都・醍醐寺三宝院の不動明王坐像の頭部内前面墨書銘にある「御眼巧匠円阿弥陀仏」が、玉眼嵌入に特化した専門の技術者であったと推測している。円阿弥陀仏は複数の快慶作品に名を残しており、この人物を玉眼製作の技術者とする見解が定説になっている<sup>9</sup>。ただし、あくまで完成した水晶レンズに瞳を入れ、面部に嵌め込む技術に特化した者を指しており、西川氏は同時に「仏所に水晶研磨の技術者がいたとは考えがた」いとも述べる<sup>10</sup>。その理由は明示されていないが、現代の水晶加工でも、電動の研磨機で水晶を一枚の玉眼に仕立てるために一週間以上を要するといひ、使う道具も仏師とは異なる。仏像の保存修理に携わる明古堂の明珍素也氏の場合は、仏像の眼部に合わせて木型を作り、専門業者に引き渡して水晶の加工を依頼するのだそうだ。また、本間紀男氏の例でも、玉眼の木型か石膏型を作って専門業者に依頼するという<sup>11</sup>。これをそのまま近世の玉眼加工の実態とするわけにはいかないが、本木型の墨書銘のうち、裏面左縁には「此形之通<sup>リ</sup>少<sup>キ</sup>不違様<sup>ニ</sup>頼上候」という一文がある。こうした指示そのものも、「頼み上げる」という謙譲表現も、工房内部に向けてのものとは思われない。おそらく、この時も水晶の加工は外注であったのだろう。

ところで、仏像に関わる水晶製品には、玉眼以外に白毫や五輪塔、舍利容器などがある。水晶の加工技術者に関する史料がほとんどないことはすでに述べたとおりだが、玉眼が外注であれば、ほかの水晶製品も玉眼と同じ場で加工されていた可能性が高い。たとえば、現在、水晶貴石細工を伝統工芸としている山梨県甲府市では、水晶細工の工房で玉眼の製作も行われている。その研磨技術は、江戸時代に京都の「玉造」から伝えられたといひ、伝承として語られるのは、天保年間(1831-45)に京都から水晶の買い付けのために甲府に来た玉造(玉屋、玉摺とも)弥助という人物が御岳の御師に水晶研磨の技術を伝えた、というものである。弥助については、僅かながらその存在を裏付ける史料も見つかっている<sup>12</sup>。

この「玉造」あるいは「玉作」という語は古代より認められるもので、玉類や石製品の生産に携わった職能集団を指す<sup>13</sup>。中世では、『公衡公記』正和4年(1315)4月25日条で、日吉山王七社の神輿造替に関わった工人のなかに「玉造」が記される。守清と妙法、成仏、そして為綱という名の玉造がこれに参加しており、神輿の装飾に用いる貴石類の加工などを行ったことが想定される<sup>14</sup>。ここでは仏師の法印朝円や法眼性慶らの参加も認められ、玉造と仏師とが同じ場で活動した具体例としても重要である。玉造の実態には不明なところが

多いが、おそらく水晶も取り扱うことがあったであろう。彼らこそ、仏師が作った木型を基に、水晶を玉眼の形へと加工する工人だったのではないだろうか。

以上、宝城坊の仁王像造立に用いられた玉眼木型の紹介と、水晶加工の工人について少々の考察を試みた。最後に、本稿を成すにあたり、博古堂 後藤圭子様、日向山宝城坊 内藤京介様には格別のご配慮を賜り、明古堂 明珍素也様、宅間工房 米長宏之様には玉眼製作について貴重なご助言を賜りました。末筆ながらここに記して心より御礼申し上げます。

- 
- <sup>1</sup> (1) 西川杏太郎「彫像の玉眼法について」(『佛教藝術』91、昭和48年。『日本彫刻史論叢』所収、平成12年、中央公論美術出版)は、玉眼嵌入の技術者について言及しているが、レンズ状に整えられた水晶を嵌め込む技術者に関する内容である。また、(2) 本間紀男『木彫仏の実像と変遷』(平成25年、大河書店)は、彫刻家としての視点から玉眼の技法について詳述するが、水晶加工の技術者に関しては「専門業者に依頼する」(295頁)と紹介するのみである。
- <sup>2</sup> 博古堂所蔵の茶箱内の彫刻類は、ひとつひとつにタグのついた紐がかかっており、本資料には「博古堂(162)玉眼木型」と記されていた。
- <sup>3</sup> 宝城坊仁王像に触れた論文等は以下のとおり。(1) 清水眞澄「伊勢原市日向薬師宝城坊の彫刻」(『神奈川県史研究』50、昭和58年)、(2) 同「伊勢原市の彫刻」(『伊勢原市史』通史編 先史・古代・中世、平成7年、伊勢原市)、(3) 『伊勢原の仏像—伊勢原市文化財調査報告書第18集』、平成12年、伊勢原市教育委員会、(4) 神奈川県立金沢文庫編『特別展 平成大修理記念 日向薬師 秘仏鉦彫本尊開帳』、平成27年。
- <sup>4</sup> 賓頭盧尊者像の台座墨書銘について言及したものは以下のとおり。前掲註3(1)、(2)、(3)及び、山本勉「《コラム》日向薬師の賓頭盧尊者像」(神奈川県立金沢文庫編『特別展 平成大修理記念 日向薬師 秘仏鉦彫本尊開帳』、平成27年)。
- <sup>5</sup> 墨書銘④は前掲註3(3)より孫引き。
- <sup>6</sup> 前掲註3(1)で指摘されているとおり、賓頭盧尊者像は中世の作とみられることから、銘文中の「共新」は「座」が台座を、「台」がその基台を意味し、これらを共に新造したものとみられる。
- <sup>7</sup> 後藤真慶は19世紀前半に活動が認められる鎌倉仏師であり、文化6年(1809)英勝寺阿弥陀三尊像のうち両脇侍像の再興を最初の事績として、以後約50年間、鎌倉を中心に数々の仏像製作や修理に携わった人物である。その事績については、三山進「光明寺本尊像考」(『佛教藝術』121、昭和53年。『鎌倉彫刻史論考』所収、昭和56年、有隣堂)に詳しい。
- <sup>8</sup> 前掲註1(1)参照。
- <sup>9</sup> なお、前掲註1(1)では、東京芸術大学の無位時代の快慶作大日如来坐像の像内銘には「開眼円□□□□」、大阪・藤田美術館の地藏菩薩立像の左足柄に「開眼行快」という銘があることから、これらの像では、それぞれ円阿弥陀仏と行快が玉眼嵌入を担当したものと解している。
- <sup>10</sup> 前掲註1(1)379頁。
- <sup>11</sup> 前掲註1(2)295頁。
- <sup>12</sup> 「金桜神社文書」のうち、天保14年(1843)12月6日付の「水晶玉紛失ニ付誓紙」に、「玉研職弥助」として記される人物が弥助と考えられる(『甲府市史』史料編 第5巻 近世、平成元年、甲府市)。
- <sup>13</sup> 浅香年木『日本古代手工業史の研究』、昭和46年、法政大学出版局。
- <sup>14</sup> これを遡る史料では、『春日社造替記』文暦2年(1235)閏6月27日条の官宣旨等に、春日社の遷宮に参加した職人として、絵師や漆工、平文師等に並んで「玉造」が記載される(『鎌倉遺文』7巻4783号)。